



おの だけ
大嶽観音堂(興福寺) 登米市南方町

大同2年(807)に坂上田村麻呂が建立、京都の清水寺の延鎮が開山と言われている。度重なる焼失により詳細は不明だが、中世には葛西氏の保護を受けたと伝わる。しかし、葛西大崎一揆の影響で荒廃し、江戸時代の元和5年(1619)に亘理坂元の三学坊永盈によって再興され、その後、伊達家の祈願寺となっている。大嶽山周辺では、酒を飲んで気性が荒くなる人を大武丸と呼ぶという。



陸前国登米郡大嶽山観音堂境内図

明治21年(1888) 4月5日 興福寺蔵

現在の大嶽観音堂は、興福寺の本堂となっているが、古くは、興福寺と天王寺が別当を務めていた。



大嶽山十一面観世音

創建由来附興福寺

大正4年(1915)9月9日

個人蔵

興福寺の中興三百年祭に合わせ作成された。創建由来や周辺の名所旧蹟、興福寺の古什物などが記されている。これによると、興福寺には大武丸の齒と鬚が残されていた。



長谷観音堂(長谷寺)

登米市中田町

大同2年(807)に田村麻呂が大和国(奈良県)の初瀬の長谷寺を勧請して観音院を建立した。本尊の十一面観音像は、妙観聖人によって刻まれ、田村麻呂が守り本尊としていた身丈一寸八分の黄金の十一面観音像が納められたと伝えられている。



坂上田村麻呂と大武丸絵馬

江戸時代 長谷寺蔵

左の鬼が大武丸、傍らで二振りの刀を手にするのが鈴鹿御前である。田村麻呂は武者姿で、幕の後ろから様子をうかがっている。『田村草子』などには、鈴鹿御前が計略を用いて大武丸から二振りの刀を奪い取り、その隙に田村麻呂が大武丸を斬る描写がある。この絵馬は、その場面を描いたものであろうか。



奥州七ヶ所観音三番掲額

長谷寺蔵

「はせはせと あゆみをここに
長谷寺の 迷いをすすぐ
谷川の水」と記されている。



のの だけ
籠岳観音堂(籠峯寺) 涌谷町

大同2年(807)に田村麻呂が十一面観音堂を建立したと伝わり、京都の清水寺の延鎮を開基としている。当初は法相宗だったが、慈覚大師円仁の東北巡錫の際に再興され、無夷山籠峯寺常住院と改め、天台宗になったと言われている。観音堂は、田村麻呂が蝦夷の赤頭・高丸・悪路王を神楽岡で打ち果たし、三者の胴体と敵味方の戦死者を埋葬した塚の上に建立したと伝わる。その塚の高低に従って建てたため、観音堂の柱の長さが皆違っているとされている。境内には、文化7年(1810)5月23日の記銘がある「征夷將軍田村麻呂一千年供養」の石碑が位置している。

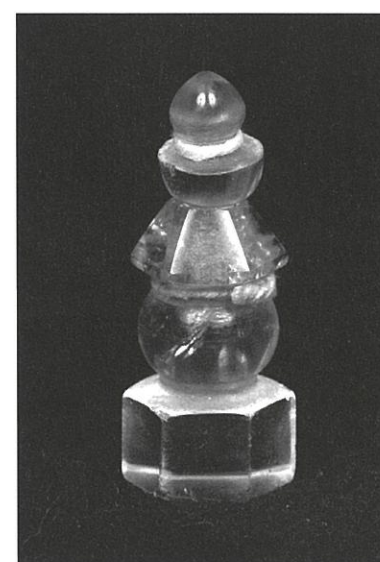


籠峯寺本尊十一面観音像(版木)

籠峯寺蔵

写真提供:東北歴史博物館

応保2年(1162)、現在の石巻市田代島で十一面観音が発見された様子を版木にしたものと伝わる。この版木は、60歳以上の老年に入った僧侶にしか摺ることが許されなかった。



六角五輪塔形仏舎利容器 籠峯寺蔵

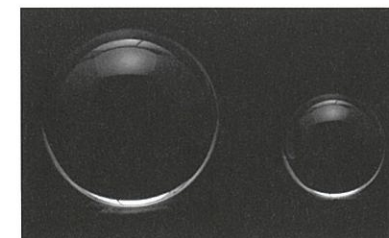
写真提供:東北歴史博物館

田村麻呂の兜の最頂部に付けられていたものと伝わる。



横笛及び容器 籠峯寺蔵 写真提供:東北歴史博物館

田村麻呂が建立の証として奉納したと伝わる。



水珠と火珠 籠峯寺蔵 写真提供:東北歴史博物館

田村麻呂が奉納したと伝わる。



田村麻呂は様々な芸能のなかにも登場する。南部神楽では「田村將軍征討記」など、能楽では「田村」である。南部神楽は、江戸時代末期に現在の宮城県北部から岩手県南部の住民たちによって始められたとされる。演目には、様々な伝説や物語が取り込まれ、娯楽性が高く親しみやすい神楽とも言われている。南部神楽の「田村將軍征討記」は、年春・年光・年久の3代に渡る物語で、御国浄瑠璃の『田村三代記』の影響を強く受けている。現在、登米市内で田村麻呂関係の演目を行う団体は、ほとんどない状況である。

能「田村」は、『清水寺縁起』などに見える田村麻呂の清水寺創建に関わる物語が基礎になっている。登米市登米町の登米能(登米謡曲会)の演目にも「田村」が残っている。登米能は、仙台藩5代藩主伊達吉村が創設した「金春大蔵流(大蔵流)」を継承し、宮城県の無形民俗文化財(民俗芸能)に指定されている。物語の終盤に武者姿の田村麻呂の霊が現れて、観音の功德と敵勢を観音の仏力で平定することができたと語るのである。

小迫の延年は、栗原市金成の白山神社の例大祭(小迫祭)で奉納され、春の農耕期を前に豊作を願って行われて来た。延年とは、平安時代から室町時代にかけて、僧侶や稚児たちが寺院で盛んに行っていた遊宴舞台の総称のひとつで、小迫の延年は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。延年は、芝舞台という丘のような場所で行われる。そこには、田村麻呂が討ち取った蝦夷の首が埋葬されていると伝えられている。



細野神楽 細野神楽保存会

登米市東和町を中心に、現在は、6名で活動している。今でも「田村一代記」を演じている。



畑岡神楽 畑岡神楽保存会

写真:佐々木繁雄『南部神楽 笹谷流 畑岡神楽』1984より

登米市南方町を中心に、現在は4名で活動している。かつては、「田村將軍征討記」を行っていたが、人手不足や三代すべて行くと長時間に渡るため、現在は演じていない。



登米能 登米謡曲会

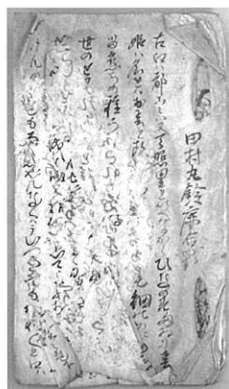
写真提供:川内印刷株式会社

廃藩後、仙台藩領内の能楽が衰退していく一方で、登米能は伝統的な能楽・狂言を継承し続け現在に至っている。

3 描かれた田村麻呂

田村麻呂は、御伽草子や御国浄瑠璃をはじめとして様々な文芸作品に登場する。このことも田村麻呂伝説が人々に親しまれていくのに大きな役割を果たした。

そして、多くの人が初めて「坂上田村麻呂」の名前を目にするのは、歴史の教科書だろう。その田村麻呂は、明治時代から教科書に登場している。桓武天皇の業績を顕彰する中で、東北地方を安定化させた人物として紹介されている。また、宮城県内では、明治44年(1911)に田村麻呂の遺蹟調査も行われた。現在のところ仙台市・伊具郡・牡鹿郡・刈田郡・加美郡・玉造郡・遠田郡・名取郡・宮城郡・本吉郡・桃生郡・亶理郡の調査結果を確認することができる。



浄瑠璃本『田村丸鈴鹿合戦』

当館蔵

浄瑠璃は、三味線を伴奏に登場人物のセリフや仕草を交えて語る芸能である。平安時代、反乱を企てた氷上皇子(早良親王)を田村麻呂が平定するストーリーになっている。この資料は書写されたもので、欠損が激しくなっている。



『田村本地』

慶応3年(1867)6月20日

当館蔵



『小学校用歴史』1

明治21年(1888)

当館蔵



「田村將軍遺蹟取調資料」

宮城郡(一部)

明治44年(1911)

宮城県公文書館蔵